

結核は昔の病気ではありません 今も重大な日本の感染症です!!



結核は昭和20年代までの長い間、「国民病」「亡国病」と恐れられていましたが、昭和26年に結核予防法が制定され、国をあげて予防や治療に取り組み、罹患率は激減し、そのままのスピードで減るものと考えられていました。しかし、1980年代になり罹患率低下が著明に鈍化、1997～1998年には一時、増加に転じ、1999年「結核緊急事態宣言」が出されました。(図1)

その後、罹患率低下は回復していますが、未だに欧米の先進国の結核罹患率が人口10万対10以下(低蔓延国)に対して、日本は2019年に人口10万対11.5と「中蔓延国」となっています。(図2) 高齢人口の増加や高齢者は自覚症状が出にくいこと、グローバル化による諸外国との往来、結核への関心の低下等が原因として言われています。2019年の新規患者数は14,460人、全患者数は34,523人、死亡数は2,088人でした。結核は、今でも1日に40人の新しい患者が発生し、6人が死亡している日本の重大な感染症です。

図2 諸外国と日本の結核登録率

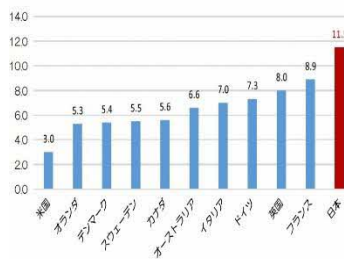
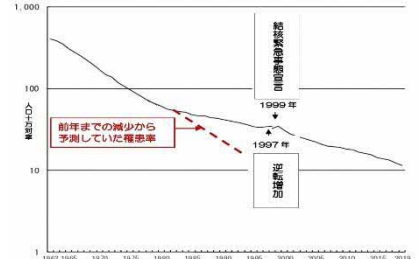


図1 結核罹患率の推移



☆結核とは？

結核とは、「結核菌」という細菌が原因の慢性感染症です。結核菌は主に肺の内部で増殖するので、咳、痰、発熱等風邪のような症状が現れる他、寝汗や食欲低下による体重減少、胸痛などが生じる場合もあります。肺結核の他、体内に入り混んで増殖した場所により、腸結核、腎結核などとなります。(図3)



☆結核の感染と発症

結核を発症した人の咳やくしゃみで結核菌が飛び散り、それを周囲の人が吸い込むことで人から人へ移ります。(飛沫感染) 健康であれば免疫力によって抑え込まれますので、「感染」=「発病」ではありません。何らかの原因で免疫力が低下すると、抑え込まれ冬眠していた結核菌が活動を始め、発病する危険性があります。

＜発病のリスクとなる主な原因＞

- ①喫煙習慣がある人
- ②人工透析を受けている人
- ③糖尿病の人
- ④HIV感染や免疫の弱い人
- ⑤ステロイドホルモンを使用している人
- ⑥胃潰瘍、胃の手術をした人
- ⑦結核高蔓延国から来た外国出生者



☆結核を予防するためには

1 免疫力を低下させないように日常生活に注意しましょう。

- (1) バランスの良い食事
- (2) 適度な運動
- (3) 十分な睡眠
- (4) 禁煙



2 症状がある時は早めに受診しましょう。

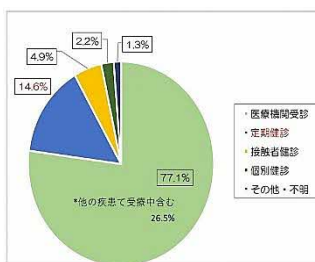
2019年、発病から初診までの期間が2ヶ月以上の割合が約2割を占めていました。痰のからむ咳や微熱・身体のだるさが2週間以上続いている場合は早めに受診しましょう。



3 定期健康診断を必ず受けましょう。

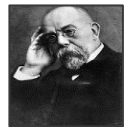
BCGの予防効果は10数年で切れるとされており、成人における予防効果は高くはないと言われています。また、結核の自覚症状は風邪様の症状なので、自己判断で受診が遅れたり、症状を自覚しない場合もあり、定期的に健診を受けることが大切です。毎年の定期健診は法的にも義務付けられており、必ず受けるようにしましょう。全結核のうち14.6%が定期健診で発見されています。(図4)

図4 結核の発見方法



結核よもやま話

「結核」の原因が「結核菌」であることを発見したのは、ドイツの医師で細菌学者のロベルト・コッホです。コッホは、世界初の感染症の病原菌発見となる「炭疽菌」を発見した後、菌の培養や染色法について研究を重ね、1882年当時、猛威を振っていた「結核」の原因が「結核菌」であることを発見し発表しています。この発見により、結核の感染経路や症状などの研究が進み、コッホは1890年には結核の診断法のツベルクリン反応を開発しています。WHO(世界保健機関)はコッホが結核菌の発見について発表した3月24日を「世界結核デー」と定め、今も世界中で年間150万人以上が死亡している結核撲滅を目指しています。



(ロベルト・コッホ)

参考：厚生労働省HP、内閣府政府広報オンライン
国立感染症研究所HP、公益財団法人結核予防会HP

健康支援係
電話：011-231-4111
(内線：35-380)